青山御流 活花手引種 三

№2676
$
349

三之巻凡例

〇此巻ハ専秋冬の種類をもつて次第をなし次されとも花状の模様に随て例となせハ聊後の手法あるへし

〇此冊まても至てハなほ得らる体の事を顕したのなきさくる圖ハ除ゑ品種をあつめて是を補ふ並ニ花形の是形を増減の趣意ともかく須宜前巻の例を推して察考あるへし　尚其後にいたりては即興の体と水庭のあやとわさ形し　夫より上に床棚附書院卓等の圖と無物茶の會只の略飾を僅に一二具を記す猶委くハ別に傳意あり

かく斜正のこゝろち形くまもてずばかり垂ハ忌し
葉とまんまるの葉にみして入置し水際の
葉ハ左の出し形ごとく組べし
委ハ次をみるべし

檜扇(ヒアフキ)
射干ナリ
烏扇トモ
鳳翼トモ
仙人掌トモ

かく斜正の席とアけ陰陽の
おもむきを考ふる専要なり

ひあふぎ

圖のごとくひあふぎの根葉ハふし
立てく細しきも好なりさるを
めくなかくとらあく いにしへよりハ悪し
葉井の志つくり らくきと

まつふる葉くねりぐる
葉をかくさくし
左の圖どうへし

めくさんも祝せて
くさをつくりて生くし
葉の長短も同立なり

がく枝のとり志やう形く上下にてあしらひてさし一がく
ちたるハよろしかし次第あちさゐのことくもちふ約束に
ちかきらひあるゆへ入れて左の圖をみるへし

額草（カクサウ）がくあちさいとも

がくうちに杉さゆるさふ多分
がくまじくつるよろしき節あり
こころへし

やつて枝留へハ枝別産の佳なるハとゞく
葉ホ茎近ひきくてあしゆへに茎
長き大葉ハ除ゐて小
葉のこと専もちゆ
ゆるしきに

風情写手
にゐんくよ後しあり次
次引き出しと
よろし

ヤツデ
八手
魚ニ覆ハ毒ヲ生ト

如斯大葉をのぞひて小葉のことを主
とりしるて紹かに生へし

砥草トクサ
木賊ナリ
蕣キハチス
槿ムクゲ花ナリ
藩籬艸トモ
二瓶

水葵
ミツアヲヒ
浮薔ナリ
水葱トモ
雨久花トモ

檀特草（タントクサウ）
如此生し
芭蕉なとなともこれらの意を推量し
此たんとく梢を聊かえ見るを葉に随ふのきつし
まつくたちの都ハ梢の葉るあたりに高きあと
みゆることよしまつ左りに出たるなれハも二段なる
同しやうに葉をいれてあしく下に二本を左右へ
ふりよく生へし
巻葉なとすこしいれるへし
深きをもれるへし

せんのふなてしこ石竹の類ハちかハ格別なる外まいい
水際なとゝかく一本つゝまちくまぜハあしく小菊なと
のごとく二本も三本も並ヘ葉さきさき揃ふ様に
ぎんとゝとりてまへし左右にこし

かくせんをとりつてふゆに
出し花形もよきに取りべし

セン ノウケ
仙翁花
剪刀秋羅ナリ
剪紗花トモ

杜若
三春柳トモ

朝顔（アサカホ）
牽牛花ナリ
狗耳草トモ
毒艸ト有

ヲミナヘシ
女郎花
敗醤ナリ
女菩芝

しをんをほくしゆ花ろくの
時ふりあしねくゝに立これを陰陽と
分けて株をなしてとかし次をくん有へし

紫苑（シヲン）

花ほと
外のしてくき

如此陽葉にて茎を抱へく入有へし
外作奥にかりつへし

よし
水あそび
葭 アシ
蘆也 葦也
アマ子クサ

杜鵑草
ホトヽギスサウ
十四
蔓梅もどき
十五

大葉形なるもの多く繁葉なるミゆるハ花の勢ひ悪し
友葉を分ちてなりとも平に重なし かくる格好葉大ひ
なるハふうとむとりてよし 跡のミえざるもよし
尚左の図を見るべし

秋海棠（シウカイドウ）
断腸花
瓔珞草 トモ

多く水際の葉を引立
器の口とかはりざる様に出べし
茎も一方ハ秋海棠の性をふくみ
打なびけて見るべし 花か葉の大ひなる
もありていづれも同じ事なり

萩ハギ
天竺艸也
鹿鳴草
芳宜艸

かく大輪を飾るゆれハ秋の情薄し
下段えぐくを除き一方を活け菊をかへく
杉し出して生へし次の幸を見へし
梅嫁（ムメモドキ）
梅賽ハトモ字不詳
かく大ていは遣へし但し梅もどきハ
葉を悉くとりされハ実多ちほれる
よみちより稀を杉へし

かく枝くせひらけてハ乱情淺し一本にして
小菊など添んよりハいちれ枝れ梢をさけ左りへ出たる二れ枝を
除き幸元に添へ一才を引きあ一種にてのまゝハ却て志情深かる
へし次の図とみへし

山梅花（サンニクワ）
茶梅トモ
海紅トモ

かくのごとくなるともみな下の梢をさけおもと添へ遣へハ
却て屈伸の間に花情深しこれ外椿沙羅樹木槿抔
をさもして巻葉大なる物ハ無世意とふくみて入るへし

瓢箪の器ハ茎に對して稚なれども
寒杜丹なれバ葉薄に茎をあらハにあらくみえたるハ
悪しき瓶の手つるなりてあらみ出る枝よし
次の圖とみるべし
しかれども葉多くて茎の余り
あらハにみえざる様子より
よろしくて生花の富貴草乃
名を奪して仏得有
寒杜丹（カンボタン）
冬杜丹
右春杜丹ナリ人巧をもつて
冬に咲せたるなり

枇杷（ビワ）

小菊

上下ともに添て流して
入るへし是非枇杷に朴木猶
又は外桝にて葉大なる立枝ハ
又は枇杷なし

水仙

水仙葉のちゞみたるをこのみけれども
めづらしからぬことくよつまでさゆる花
甚し茎も余りよきくみてゆかびの趣を
うしなふ故に図のごとくし

水仙 金盞銀臺花とも
黄玉花とも
玉蘂花

かくのごとくなれはまくなれに茎葉なれ
ゆるやかに差置し葉の姿ひろく
初巻にくはし

あゝのこゝく風情
何程枝もろくとも

みだれてハ悪し葉のふり
余情なし
次の生しとこゝし

水仙花
仙骨トモ

おくつよゆら形るゝと
よしと深ふ餘情ま
まあり

イノコヤナギ
狗柳
河楊
蒲柳
家子柳

なんてん
水仙

卅 南天一挿ハよき枝 なんてんは
梢ばかりより元ひとさし出る枝 ゆくのきおもひなれば
ながめ薄し低き枝をとり根の曲りどれぐもひて
たんまり添へ置し 梢の實をまさ多るもの二ふさ計も
残し余はきるべし 水仙は葉曲る迄却ていはし 次をさくし

如斯ひきくくく水仙の葉も
一方を出きて一才ハ寄ま出し

南天燭
南天竹
蘭天竹トモ
凡八名有

水仙の葉曲あるも性大なれとも多く葉ミにこまかくあるハ結しいつれも形偶にいれつゝまゝよし深の図とも兼し

水僊（スイセン）

如斯私にまつく曲あるもとこに結し

此蝋梅より以下ハ悉く集し得たる許而已と圖し顕也
ゆへに四季の順もいはれなく花形の大小に随て二瓶
も三瓶も寄せたる風体をとり合せたるもあなかちに
に節興の趣花となるに附侘様繪あしらひ棚附書院
附趣をいさゝか圖し置しもあり

蝋梅（ラウバイ）

寒梅
蘭梅
黄梅

水仙

連翹（レンギヤウ）
いたちぐさ
いたちはぜとも

陸英（ニワトコ）
接骨木とも

蒲公英（タンポポ）
ふぢな
つゞみぐさとも

きんせんくわ
別名奥に悉し

大手まり
繡毬花
雪毬花
氏
あやめ
紫羅襴花
溪蓀
氏
梨花
快栗
氏
サクラサウ
櫻草
二十八
二十七

なつむめ
藤天蓼 マタヽビ
薊花 アザミ
まゆはき艸とも
夏椿 ナツツバキ
沙羅雙樹
堅固樹
撫子 ナデシコ
とこなつとも
瞿麥
洛陽花
石竹
南天竺艸
二十九

雞頭花
とさか草とも
雞冠花 同
つハ 山ふきとも
槖吾 杜衡 同
美容柳
金絲桃ナリ
長春花
日季花
薔薇ノ類ナリ

仙蓼
珊瑚なり
猿猴杉
山茱萸
烏兜
毒艸なり
烏頭なり
雙鸞菊
海老根草
他偷草なり
鈴振艸

かく平瓶砂鉢抔に生くる時ハふといをもちゆ但あらても茎葉のやハらかき物ハ図のごとく右ら結ひ小柄笄けさんなどの外兄結ひがもして入るべし又木艸共に茎のかたき物ハ下に此図のごとく根を三つも四つも割りて杉とこを立広し也是の仕方ハ時の流行にして生無つ之流儀の事なしとハ世にいふ此外杉也たくさんに袋を剪口へぬりて平鉢などに入るるも有りまた女子児童も無むるの奥のこ

ふとい

小刀留

おさへ
壓留

はまなす
玫瑰花也
薔薇ノ一種ナリ

みづひきそう
水引艸
海根ナリ

ほたるくさ
鴨跖草也
碧蟬花
つゆくさ とも

河骨
鎖留
牡若
蟹留
図のごとく根をくゝりて
紫蘭
白及草
連及トモ
水仙
鋏留
砂利とめハ小砂利
を高くもりて花根
中石を五つ六つよせ
押ゆる也

菊
軸前の花
芭蕉
甘蕉
繪前の花形

紅黄草（カウワウサウ）
藤菊トモ
卓下花
ハ得有
木蓮花（モクレンケ）
木蘭モ

サンカク井
三角藺
茳芏ナリ
七島氏